

# 琉球文化財研究室

幸喜 淳<sup>1</sup>

キーワード：首里城再建 被災文化財修理 復元製作 琉球染織調査 琉球食文化研究 漆塗装技術 古瓦製作・瓦葺き  
伝承者養成事業 受託業務（文化財修復・展示） 普及啓発（講演・展示）

## 1. はじめに

琉球文化財研究室は、首里城に関する資料収集、調査研究、技術開発及び普及啓発を行うとともに、首里城公園管理部が維持管理を行う首里城公園の利用促進につながる活動を推進する。

主な事業としては、調査研究業務と受託業務、普及啓発業務を実施している。地域貢献として大学への講師派遣を行い、首里城の歴史文化を普及啓発した。

首里城は火災によって建造物の他、美術工芸品の一部が焼失した。正殿の再建については、令和8年度の完成に向けて、進められているが、被災した美術工芸品の修理は、令和3年度より開始し、修理可能な点数の少ない染織、絵画については、昨年度までに終了し、令和7年度に陶器の修理が終了した。一番被害の大きい漆器類の修理を引き続き実施する。加えて、焼失あるいは劣化により活用が困難となった資料については、模造復元事業を実施し、染織・書跡の製作を開始した。

また財団として収蔵施設及び修理室の整備が完了し、財団施設内での職員による直接修理を開始した。

## 2. 実施体制

琉球文化財研究室の令和7年度の体制は、総合職3名、一般職4名の合計7名体制であった。

主な担当は以下のとおりである。

- ・総合職（3名）  
漆塗装担当1名、染織担当1名、食文化担当1名
- ・一般職（4名）  
書跡・絵画・陶磁器担当1名、人材育成担当1名、漆器修理担当1名、保存環境担当1名

## 3. 実施内容

### 1) 琉球食文化に関する調査研究

文化庁より「食文化ストーリー事業」の補助事業の採択を昨年度から継続して採択を受け、琉球・沖縄についての島野菜アンケート調査や旧盆の行事食、琉球料理に関連する文献調査に加え、昨年度実施できなかった「クスイムン（養生食）」について

の調査を行った。調査については、それぞれの研究者や琉球料理ユネスコ無形文化遺産登録推進委員会と協力し実施し、調査結果報告書を作成した。琉球料理保存会にて発表を行った。

また首里城公園での「ちんすこう」づくり体験や沖縄県立博物館・美術館での琉球菓子と琉球音楽のワークショップなど普及啓発活動を実施した。

### 2) 収蔵品修理事業

財団所蔵絵画資料のうち、呉師虔筆の関羽像の解体修理を行い、通常の裏打ち紙とは異なり、絹布を用いられている事が分かった。

首里城火災により被災した漆器の修理では、7件の修理を開始し、3件を完了、4件は次年度以降に継続する。また陶器では、劣化した陶器に合わせた保存箱の製作を実施し、陶器修理が終了した。

加えて、修理作業が長期に渡るため、沖縄県内にて修理技術者の人材育成を開始し、修理技術者を招いた勉強会を複数回実施した。

### 3) 琉球・沖縄の染織資料に関する調査研究業務

琉球王国時代における首里王府の正装である黒朝衣の復元製作に向け、佐賀大学、東京文化財研究所との共同研究を開始し、科学調査、繊維調査等の試験を行った。

関連調査として徳之島の衣装調査を実施予定であったが、天候不良のため現地調査が出来ず、関連資料での調査となったため、次年度に現地調査を実施予定。

### 4) 漆塗装検討業務

琉球産弁柄について、正殿の塗装顔料として、久志間切弁柄（自然採取）は、国営沖縄記念公園事務所へ13kgの提供を行い、全ての必要数量を納品した。

また正殿での塗装については、北殿での久志間切弁柄（BIOX 弁柄）の使用のため、不燃材料への使用等について、耐候性試験を実施し、検討を行った。

名護市久志集落にて製造タンクを整備し製造を開始した。取水埋設管やバクテリア培地の検討など弁柄の採取量や品質の安定化に向け、採取量増加の試験を実施した。

今後は久志区へ本格製造設備での製造安定化を

<sup>1</sup> 琉球文化財研究室 室長

目指し、正殿塗装の仕様に合わせた耐候性試験を実施し、首里城北殿塗装へ使用にむけて調査検討を行う。

## 5) 受託業務

### (1) 琉球王国文化遺産集積・再興事業 実施設計業務

沖縄県立博物館・美術館より受託した琉球王国文化遺産集積・再興事業 実施設計業務において、当財団と株式会社 国建、Ma2studio の3社による共同企業体を組織し、業務を実施した。

今年度は、模造復元製作に関する8分野20件の調査および試作製作、SNS等を活用した事業PR、発信イベントの実施などを行った。

また、それらの調整および資料作成を行い、最終的に「業務完了報告書」等の成果品を納品した。

### (2) 首里城復興基金事業 製作検討業務

株式会社国建より受託した首里城復興基金事業において、垂飾り（瓔珞）に関する製作業務を担当し、製作仕様の検討および製作管理・監修を行い、製作が完了した。

以上、これらの受託業務を通じて得られた成果は、今後の首里城公園の展示や文化財の保護・活用に資することが期待される。

## 6) 人材育成事業

一昨年度からの継続で、国・県・財団・沖縄県立芸術大学の4者間にて締結した人材育成に関する協定書に基づき、首里城復興課からの業務委託を受け、建造物木工及び木彫刻について技術者養成事業を行った。関連する各分野の専門家を招いた座学及び実習を実施した。建造物木工分野では5名、木彫刻分野では2名の研修生を受け入れ、実習を行った。

県外視察では、文化庁主催による「日本の技」フェアが福井県で開催され、現地で視察を行った。日本伝統建築保存会を始めとする国選定保存技術の保持団体と交流を行った。

## 7) 普及啓発事業

令和7年9月27日特別講演会「ヨーロッパに渡った琉球王国の文化遺産」る講演会を開催した。現地参加、WEB参加を含めると200名を超える参加者が集まり、本研究成果に対する高い関心がうかがえた。併せて沖縄県立博物館・美術館のホワイエを活用し、「在外琉球・沖縄関連文化財調査パネル展」を開催した。

## 4. 外部評価委員会

今年度の事業概要の報告及び課題管理シート9件に対し、研究顧問3名より以下の評価をいただいた。

### 【研究顧問】

高良倉吉氏（座長・琉球大学名誉教授）

西大八重子氏（生活文化研究所西大学院院長）

宮里正子氏（元浦添市美術館館長）

\*安次富順子氏は、一身上のご都合により2025年4月辞任。

## 1) 評価すべき点について

### (1) 漆塗装関連調査

- ・研究成果が首里城正殿の復元作業に活用。
- ・これまでの調査研究の内容についてまとめ、発表されている

### (2) 琉球染織資料の調査研究

- ・科学調査について、外部機関との共同研究の開始と染織品修理の実施。
- ・黒朝衣の復元技術研究および琉球古刺繍の製作が進展。
- ・ベルリンの染織品資料についてのシンポジウム実施。

### (3) 琉球食文化の調査研究

- ・「食文化ストーリー」の継続調査を通じ、琉球食文化の研究活動が進展。

### (4) 被災資料調査・修繕・複製品製作

- ・科学分析に基づく修理・復元製作が進行していることは良い。
- ・漆器や陶磁器の修理、染織や書跡の復元製作が順調に進行している。
- ・修理技術者の育成を兼ねたワークショップを実施されたことは良い。

### (5) 沖縄県立博物館・美術館別途受託業務 琉球王国文化遺産集積・再興事業

- ・県立博物館・美術館の受託業務を通じ、財団のこれまでの調査成果を活かしている。

### (6) 漆塗・琉球赤瓦製作施工文化財保存技術（伝承）事業

- ・文化庁助成事業「琉球建造物塗装及び古瓦製造伝承者養成事業」が順調に進行し、古瓦製造実習講師が選定技術の個人認定、瓦葺きの実習講師と受講生らで足出した琉球瓦葺技術保存会が選定保存技術の団体認定されたことも大きな成果である。

### (7) 研究成果の発信

- ・講演会、パネル展、取材対応、依頼原稿執筆等の実施。
- ・SNS・ホームページの活用により、広報活動を強化。
- ・ネットワーク構築。総合的な観点から染織文化ネットワーク体制を構築し、共同研究を推進。

## 2) 見直すべき点について

### (1) 琉球食文化の調査研究

- ・琉球王国時代の饗宴料理の再現が未実施。食文化ストーリー事業での委員との連携を進めてほしい。
- ・普及啓発活動は積極的にされているが、調査研究としての位置づけがわかりにくい。

### (2) 人材不足と組織強化

- ・食文化研究などで、担当者が不足。研究継続のための人材確保が急務。

<sup>1</sup> 琉球文化財研究室 室長

### (3) 研究成果の発信と共有

- ・シンポジウムは多くの参加者があり、好評価だが、アンケートを実施し内容についてその効果が分かるようにすべき。
- ・学会発表や国内外の研究機関との連携強化と情報発信の拡充が求められる。

## 5. 今後の課題

琉球文化財研究室における調査研究事業には、①首里城公園機能の向上、②文化環境の保全・継承、③首里・沖縄地域の文化・産業振興、④当財団の発展の4つの目的が挙げられる。

令和8年秋には首里城正殿の再建が完了し、新たな指定管理業務が開始される。そのため、企画提案に関する調査研究が必要となる。

このような状況を鑑み、首里城公園正殿の展示機能の向上と当財団の発展に関する調査研究を最優先課題とし、これを踏まえた事業推進が求められる。

首里城の再建・復元事業は国・沖縄県によって進められており、正殿の後に北殿・南殿などの建築物が引き続き、再建が進められる。今後、漆塗装に使用された琉球産弁柄の定期修繕に向けた長寿命化、復元製作が終了した首里城正殿瓔珞(ようらく)などの劣化調査、維持管理など引き続き調査を行っていく必要がある。また新たに琉球王国時代の正殿内における調度類等の調査研究を開始し、展示の充実を図る。

また火災で被災した美術工芸品の修理は正殿の再建後も長期にわたって継続されるため、修理業務に関わる人材の育成も重要な課題である。このため、修理室の整備を行い、令和7年度からは、財団における修理業務が本格的に開始した。令和8年度には、首里城基金を使用して修理・復元を行った美術工芸品について展示公開する事を計画しており、適切に修理復原計画を実施することが求められる。

本事業の円滑な推進とともに、首里・沖縄地域の文化の保全・継承、産業振興に貢献することを目指す。

また、沖縄県立博物館・美術館が実施する委託事業「琉球王国文化遺産集積・再興事業 復元製作業務」において、令和8年度からは、試作を踏まえて本格的な復元製作が開始される。当財団がこれまでに培ってきた科学調査および復元製作研究のノウハウを活かし、より効果的な事業展開を進めることが求められる。